

## 7-5 シールド工事の立坑施工で測量ミス発覚！！

### 1. 立場と仕事

ゼネコンに入社して3年目で現場に配属された時のことだった。私にとって初めての大规模現場の勤務だった。工事の内容は、φ5540のシールドトンネル工事で、発進立坑、到達立坑、通過立坑2か所があり、その施工管理を同僚職員Bとともに担当していた。

### 2. 遭遇した事態

当時、シールドは昼夜間連続施工で、施工箇所も分散しており、2人で管理するには非常に繁忙な状況であった。施工箇所の一つである通過立坑は深さ25mと深く、立坑上での方向測量とその結果を反映して立坑内での方向測量を同僚職員と分業した。厳しい工程の中で迅速に測量することを求められていたため、立坑上での測量を担当していた私は立坑内にいる同僚職員への連絡時間を少しでも短縮するために、立坑上での測量成果をメモ書きに記し、立坑下の同僚職員に放り投げて伝達した。ところが、同僚職員は基点の位置を勘違いして、通過立坑の到達防護（凍結工法）の水平ボーリングの削孔方向をミスしてしまい、しかもお互いに規準点の確認を怠った。

ミスに気付かずに工事が進み、凍結管の水平ボーリングも7割程度完了したころ、立坑上より内部を眺めていたら、削孔方向がおかしいことに気が付いた。シールド進入法線とボーリングの削孔方向がずれているのではないかと私はとても大きな動揺に見舞われた。

### 3. 対応内容とその結果

同僚職員Bと相談して即座にボーリングを中止したが、あまりの事態の深刻さから当日中には作業所長に報告できなかった。そして、シールド進入法線の調整ができないか、などの検討を行った。しかし、どうしても作業の手戻りが避けられないと判断し、ミス発見から3日後にようやくBとともに作業所長に報告した。作業所長からは必要な指導があったものの、叱責を受けることはなかった。

作業所長からの指示を受けた私は手直しに向けた詳細な検討を行い、施工完了部分を引抜き、再度方向セッティングして再施工することになった。その結果、シールドの到達が3ヵ月ほど遅れた。また、ボーリングの再施工費用が膨大に発生して、工事原価に甚大な損失を与えてしまった。

きちんとした情報伝達の重要性を身をもって認識した。若い時のこの失敗が、以後の仕事に活かされていると考えている。現場でのチェック、確認作業、安全点検指導等には時間を惜しまないことを肝に銘じている。また、社員や作業員とのコミュニケーション、部下の指導育成（指導はしても叱責しなかった所長の姿勢）、技術の伝承にもこの経験が大いに活かしている。